

研究結果報告書

研究結果

風見章はジャーナリストあがりの政治家で、日中戦争勃発した近衛文麿内閣期の書記官長と法務大臣を歴任し、いわば日本の戦時中における政策遂行を担っていたキーマンの一人であった。1938年1月16日、風見は「爾後国民政府を相手とせず」という第一次近衛声明を発表し、日中政府間交渉による戦争終結の道を閉ざした。後に風見は事件の早期解決のために様々な手段を使ったが、軍部（とくに陸軍）の統制力不足と統帥権問題によって、それらの努力は水泡に帰した。彼は、軍部を押さえることの重要性を再度認識させられた。その軍部に対抗する勢力を構築するため、風見は国民の力を結集する新体制運動を起したが、その運動は最終的にファッショ組織の大政翼賛会に変質した。風見は1942年4月に実施された翼賛総選挙には立候補せず、政界を退いたが、戦後の日中関係を憂慮した彼は自分の政治家として責任を痛感し、1952年に政界復帰を果たした。風見は日中民間貿易協定の締結や民間貿易の窓口となる日本国際貿易促進協会の創設、中国在留日本人居留民の帰国、日本に強制連行された中国人殉難者の遺骨送還、さらに日中国交回復国民会議の創設など、日中関係を促進するために国民の力を結集させ、様々な運動においてリーダーシップを発揮した。1958年の長崎国旗事件によって日中民間交流が一切断絶となった後、風見は「反省声明」を発表し、日本民族の将来の発展のために国民の侵略戦争に対する反省を呼びかけた。同声明は日本ではあまり評価されなかったが、中国側では非常に重視された。その後、中国側は石橋湛山の訪中招待状も風見経由で出すほどとなった。風見の努力により日中民間交流再開の糸口を辛うじてつないだのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

「入閣前の風見章」、王宗瑜、「西南大学における日本研究」シンポジウム、2010年12月、西南大学（中国重慶）；
「風見章と中国」、王宗瑜、「2011年度日本語教育と日本学研究」国際シンポジウム、2011年5月、同済大学（中国上海）；
「近現代日本人の中国認識とその行動——風見章を中心に」、王宗瑜、「地域研究としての日本学」国際シンポジウム、2011年10月、四川外語学院（中国重慶）；

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

「入閣前の風見章」、王宗瑜、『西南地区日本学的構築』（重慶出版社）、2011年8月；
「講和問題と風見章」、王宗瑜、『海大日本研究』（第二輯）、2012年6月（予定）；
「戦後中日民間貿易問題と風見章」、王宗瑜、『日語教育と日本学』（第2輯）、2012年8月（予定）；

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

『近現代日本人の中国認識及其行動——以村田省蔵・有田八郎・風見章為例』、王宗瑜、重慶出版社（予定）、修正中、2012年12月予定